

# 三河の昆虫

No. 15 1976年5月

〒448 刈谷市井ヶ谷町  
愛知教育大学昆虫研究室内  
三河昆虫研究会 発行  
第一プリント社 印刷  
☎ ◀56▶ ㊤ 4468

## 三河地方におけるトンボ目録 第Ⅱ報 (1975年度)

竹本秀邦

筆者は前年度に引き続き、三河地方におけるトンボの分布や生息状況などについて調査をし、新しく12種を確認したのでここに報告する。これで、この地方のトンボ類は67種になる。

なお、この目録に記した年次は、すべて1975年度であり、データの重複するものは省略し、各地における初記録のみを記した。

しかし、記録の少ないものはすべて記載した。

### 蜻蛉目 (ODONATA)

#### A 均翅亜目 ZYGOPTERA

##### イトトンボ科 Agrionidae

1. ベニイトトンボ  
豊橋市大池, 11 - IX (5♂); 豊川市, 15 - IX (1♂1♀)。一般に個体数はあまり多くない。

##### アオイトトンボ科 Lestidae

2. アオイトトンボ  
知多半島, 28 - VIII (3♂1♀); 岡崎市, 15 - IX (5♂1♀)。発生地では多産する。

#### B ムカシトンボ亜目

##### ANISOZYGOPTERA

##### ムカシトンボ科 Epiophlebiidae

3. ムカシトンボ  
田口, 2 - V (1♂); 同7 - V (2♂)。

同地域には個体数は少なくないが、非常に急速で採集は容易でない。

#### C 不均翅亜目 ANISOPTERA

##### サナエトンボ科 Gomphidae

4. タベサナエ  
岡崎市, 8 - V (3♂2♀)。同地域には個体数も多いが、その他の地域ではあまり見られない。
5. クロサナエ  
田口, 7 - V (1♂); 同25 - V (3♂)。  
個体数はあまり多くない。

##### ヤンマ科 Aeschnidae

6. ミルンヤンマ  
豊橋市, 12 - IX (2♂2♀); 岡崎市, 15 - IX (1♀)。豊橋市にはかなり多産する地域がある。
7. コシボソヤンマ (羽化殻のみ)  
鳳来寺, 29 - VII。
8. オオルリボシヤンマ  
段戸山, 4 - VIII (3♂1♀)。同地域では個体数も多い。

##### エゾトンボ科 Corduliidae

9. タカネトンボ  
段戸山, 4 - VIII (1♂); 豊橋市, 13 - IX (1♂) 個体数は少ない。

##### トンボ科 Libellulidae

10. リスアカネ

知多半島, 28 - VIII (2♂); 豊橋市, 12 - IX (2♂) 個体数はあまり多くない。

11. ネキトンボ

岡崎市, 8 - VII (1♂); 段戸山, 4 - VIII (1♂) 平地には少ない。

12. ハネビロトンボ

岡崎市, 8 - VII (1♂); 同18 - VII (1♂)

; 同15 - IX (1♂); 知多半島, 28 - VIII (1♂) 本種ま南方系のトンボで, 現在のところ県下での土着はまだ認められていない。岡崎市での記録は興味深い。

## 東三河の糞虫 (II)

伴 憲 隆

筆者は本紙の6号(1974年3月刊)で, 東三河地方の糞虫18種について報告したが, その後の調査で新に5種を発見することができたので報告する。なお, 追加種を発表するにあたり, 標本について援助をいただいた大平博士, 同定をお願いした三宅義一先生に厚くお礼申し上げます。

### 1) *Caccobius jessoensis* Harold

マエカドエンマコガネ

茶臼山 (15 - VI, 1975)。

当地は長野県との県境で, 地理的にみて, 以前から採集できるのではないかと思っていたが上記のとおり牛糞から得られた。

### 2) *Aphodius urostigma* Harold

フチケマグソコガネ

額田郡大幡 (31 - V, 1972)。

牛糞などに多くみられた。また, 灯火でも得た。

### 3) *Aphodius unifasciatus* Nomura et Nakane

クロオビマグソコガネ

本宮山 (30 - III, 1975)

三重県御在所岳が原産地である。本種は産地によって上翅の斑紋に変異がみられ, 本宮山のもは基本型であった。すなわち, 上翅は黄色で, 中央のやや後に黒色の屈曲した横帯紋をそなえ, 翅端部は多少褐色をおびる。人糞から得られた。

### 4) *Aphodius mizo* Nakane

ミゾメナグソコガネ

豊橋市嵩山 (18 - X, 1974), 本宮山 (6 - IV, 1975)。

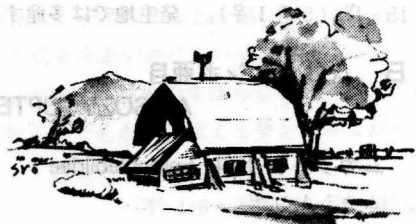
原産地は大坂箕面, 奈良多武峰, 奈良春日山で, その後神奈川県の相模大山付近にも産することがわかっている。筆者は本宮山に生息する鹿, 猿, イノシシなどや人糞などから, 多数採集することができた。しかし, 嵩山では牛糞から1頭得たのみである。

### 5) *Psammobius convexus* Waterhouse

セマルケシマグソコガネ

伊良湖 (3 - VI, 1954)。

体長 2.5mm内外の小型種なので, 注意してないと見つけにくい。一般に砂地にいて, 灯火にも飛来する。なお, 上記の採集日は, 大平博士によるもので, その後, 松野更一氏も同地で1頭得ている。



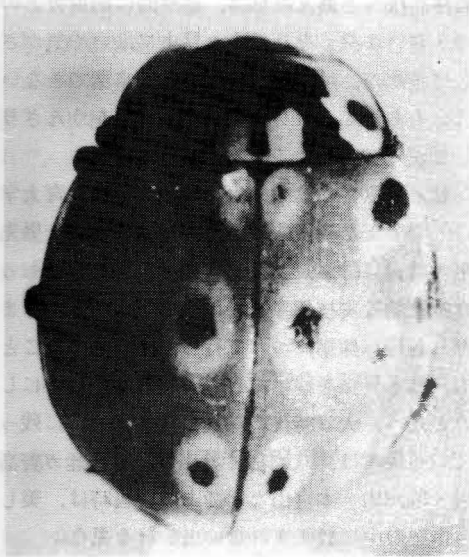
## 三河に産する珍しいテントウムシ

松野 更一

## 1. ウンモテントウ

1974年7月27日に段戸山裏谷の原生林で夜間採集をした際、燈火に飛来したのを1頭採集した。

本種は1955年に神谷一男氏が奥三河の昆虫相で発表されて以来、一度も報告されていない。三河地方では珍しい種ではないかと思うので、ここに報告する。



第1図 ウンモンテントウ

## 2. ハラグロオオテントウ

1974年8月4日に豊根村三沢でシラカバの木に多数這っているのを発見し、採集した。

本種はカメノコテントウやオオテントウとともに日本産テントウムシ類の中では最も大型で普通に見られるナミテントウやナナホシテントウのほぼ2倍もあり、真横から見ると背中が高く出っ張り、さやばねの外縁が、そりかえった特徴ある種である。このように大型で目立つ種であるのに愛知県からの記録は未だないように思われるので、ここに報告する。

## ＜参考文献＞

## (1) 神谷一男

(1955) 奥三河の昆虫相, 北設山岳及び鳳来寺山県立公園一帯の自然科学: 33~70, 愛知県商工部通商観光課。

## (2) 穂積俊文

(1974) 東海甲虫誌 (第20報) 今までのまとめ, 追加, 訂正, (その1) 佳香蝶, 26 (100): 105~106。

## 本宮山のゴホンダイコクコガネについて

伴 憲 隆

1952年5月31日に愛教大の大平仁夫博士が本宮山のクラガリ山道で本種を採集されているがそれから今日まで、本種を再びこの山で採集した記録はないようである。筆者は、1975年10月26日に本宮山へ採集にでかけ、登山道にある数

個の牛糞をみつけ調べた所、本種の雌を1頭発見したので報告する。

## 私と昆虫

## —その11—

太田鉄男

私と昆虫との第1の出会いは、小学校5年の時である。隣に住んでいた中学2年の女の子が夏休みの宿題で昆虫採集をしていたのを手伝った時である。昆虫にも女の子にもその時、初恋をしたのである。その年の夏休みは、とても楽しく短い夏休みであった。その時の昆虫には、どんな種類がいたのかははっきり憶えていないが今よりも数十倍の虫がいたことは確かである。

私と昆虫との第2の出会いは、愛知学芸大学の付属安城中学校に入学した時である。当時の



第2図 私とその家族

校長先生は、神谷一男先生だったのである。神谷先生は、大学教授と兼務されていたのである。先生の研究のお手伝いとして、授業後に勇んで実験室に行ったのである。お手伝いといえば聞

こえはいいが、誘蛾燈に集まった虫を仕分けするだけのことである。だが、私にとっては、驚異の毎日であった。今まで知らなかった虫との出会い、昆虫学という学問との出会い、そして最大のでき事は神谷一男先生や研究室の人たちとの出会いであった。中学校を卒業して、安城農林高校へと進んだ私は、必然的に病虫害とのつき合いが深くなり、少々昆虫にはいや気がさしてきたが、単位を取らなければ卒業できないこともあって、ウンカやメイチュウをうんざりしながら追いかけていたこともある。

私と昆虫との第3の出会いは、愛知教育大学に入学できた時からである。待望の神谷一男先生の講義に酔い、大平仁夫先生の真心のこもった神技的な実技指導を受けることができた。また、各地へ採集につれて行ってくださったことも、私と昆虫を終生結びつけ離れないものにしたと思う。大学時代の採集で特に思い出に残っている場所は、八ヶ岳・奥志賀高原・蛭ガ野高原・段戸山・本宮山などである。当時は、美しい自然の中に数えきれない虫の群を見た。

私の好きな昆虫は甲虫類である。卒業論文もマメコガネの形態・生態について書いたのであるが、今でも多分に蝶に魅かれている。それは昭和41年の7月～8月の1ヶ月間を、大平仁夫先生や有志の方々と、沖縄の島々を採集旅行してからである。南国の蝶の美しさにとりつかれたのかも知れない。

現在は、子どもたちと一緒に、身のまわりの昆虫を追いかけている毎日である。

自分が知った昆虫のすばらしさを、明日の日本を担う子どもたちに伝える夢を抱きながら。